

減らせ突然死 AED 推進フォーラム 2025

AED で命を救える社会の『仕組み』づくり —— 街中における緊急時の AED へのアクセス改善に向けて ——

2025 年 12 月 3 日（水）、当財団の名誉総裁の高円宮妃殿下に御来臨賜り、「減らせ突然死、AED 推進フォーラム 2025」を一橋講堂（東京・千代田区）にて開催いたしました。

今年度は、当財団の掲げる 3 つの S のうち、「Social」をテーマに「AED で命を救える社会の『仕組み』づくり～街中における緊急時の AED へのアクセス改善に向けて～」と題し、当財団理事長の三田村秀雄が「チーム」と称する、AED 普及推進という同じ目的を持った、さまざまな人たちがまた今年もフォーラムに集い、熱い討論が繰り広げられました。

AED を市民が使えるようになって 21 年目、街中には多くの AED が設置されたなかで、いかに迅速に電気ショックをかけて心停止した人を一人でも多く救うことができるのか、人の行動、社会の仕組み、システムの工夫など、さまざまな視点から、私たちがこれからなすべきことが語られています。

本フォーラムの実際の模様は動画として記録しましたので、YouTube でご覧ることができます（6 ページ参照）。本稿ではそのエッセンスを紹介します。



開会の辞 三田村 秀雄 理事長



私ども日本 AED 財団は、設立当初から 3 つの S（スクール、スポーツ、ソーシャル）を掲げ、それぞれの分野で AED の普及推進を目指してきました。昨年及び一昨年のこの推進フォーラムにおいては、スクールとスポーツをメインテーマに皆さまとディスカッションさせていただきました。このスクールとスポーツには共通点があります。学校やスポーツ施設ですから、そこには人がいて AED もあります。あとは定期的な訓練を繰り返していれば、速やかに、できれば 3 分以内の AED の使用が可能です。

それに対して、今回のテーマであるソーシャルは、路上など街中での心停止への対応となるので、もう少しハードルが高くなります。周囲はほとんど知らない人たちばかりで、AED もどこにあるかわかりません。そのような状況で迅速に人を救命するためには、いろいろな知恵と工夫が必要です。まわりにいる人たちとの瞬時の協力体制が欠かせませんが、さらに多くの協力者を呼び込む必要があります。離れた所から AED を持ってきてくれる人がいないかを探しだし、その人に現場や AED の位置を教えるといった工夫も、今ならソーシャルネットワーク、あるいはナビゲーションシステムといった IT を利用して実現可能です。

今日はこのソーシャルシーンでの救命をメインテーマに、ソーシャルネットワークシステムを活用し、あるいは世の中にもっとソーシャルマーケティングを盛り上げて、瞬時の協力体制を築き、機能的なチームワークを発揮するために何が必要か、短い時間ですが、皆さまと充実したディスカッションを行っていきたいと思います。

高円宮妃殿下 お言葉

一昨年、私がスコットランドで屋外のレセプションに参加した時のことです。

6月の夕方で、例年であればスコットランドは涼しい国ですが、温暖化の影響か、まだ日差しが強く、大変暑かったです。さらに、スコットランドの男性の正装は、皆さんよくご存知のキルトの上に、さらに厚手のジャケットを着ます。

そのような中でお酒を飲んで談笑していた男性の一人が倒れました。日本人なら誰もが熱中症を疑う状況ですが、ふだんは涼しく熱中症の意識がない国ですので、3人の医師が居合わせたにもかかわらず、服を脱がせたり体を冷やしたりせずに、ただ車の陰で安静にさせているだけでした。私は二度ほど熱中症ではないかと声をかけたのですが、医師が付いていたのでそれ以上強くは言えませんでした。

救急隊が1時間後に到着したのですが、やはり熱中症でした。幸いなことに命には別状はありませんでしたが、もしももっと重大なことになっていたら、私はもっと強く言うべきだったと一生悔いたのではないかと思います。

昨年のAED20周年を機に「まず呼ぼう、AED」というスローガンが使われております。AEDという、命を救うことができるリセットボタンを私たちは持っています。医師に声をかけた後でも、そこに医師がいたとしても、皆さんがAEDを呼べば（持ってくれれば）、いろいろなことができます。倒れた人はご自身ではもう何もできませんが、きっと誰かに何かをしてほしいと思っていると思います。そしてAEDで命を救うためにはスピードが大切です。皆さんがいつでもAEDを呼ぶ、持ってくるために、AEDのある場所を知ること、そしてパニックにならず動くためには、日頃のトレーニングが大切です。こうした工夫を皆さんと一緒に勉強させていただくことを今日は楽しみにしております。

—街中における



高円宮妃殿下ご入場



会場の様子



会場の様子



会場前に展示された AED

第一部 自分たちの日頃の準備が役立った！

座長：武田 聰
松岡 康子

日本 AED 財団 常務理事/東京慈恵会医科大学 救急災害医学講座 主任教授
日本 AED 財団 実行委員/NHK 名古屋放送局記者

- 誰にでも起こる だから備える（インタビュー映像）
中村 俊輔 元プロサッカー選手
- 日頃の訓練や学校での実習が役に立った
小池 基 横浜市緑消防団
- 救われた命によって救えた命～半年間での 2 つの奇跡
山口 寛 ナカシャクリエイティブ株式会社代表取締役社長
- 万博における AED GO を活用した救命体制
木下 哲男 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会危機管理局 担当課長
- 万博における救命体験
山崎 祐嗣 万博で起きた救命事例のバイスタンダー



座長 武田 聰



座長 松岡 康子



小池 基



山口 寛



木下 哲男



山崎 祐嗣

第一部は、元横浜 FC コーチの中村俊輔氏のインタビュー映像から始まりました。中村氏は 2025 年 8 月 9 日、ニッパツ三ツ沢球技場（横浜市）で行われた J リーグの横浜 FC 対浦和レッズ戦で、突然観客が倒れた際、チームの AED を持って観客席まで走り、その場にいた医師に届けました。中村氏は「一刻を争う。だからとっさに動いて」と語り、「助けようという意識と AED がそこにある環境が必要」と語っています（詳細は 8 ページコラム参照）。

続いて壇上では、一般的な現場で起きた救命事例 2 件と、大阪・関西万博での救護体制と救命事例が紹介され、日頃からの備えがいざという時の救命に繋がるということを改めて確認することができました。

消防団の小池氏は「自分が遭遇した現場には多くの人がいましたが、倒れた人に AED が貼られているだけで、誰も胸骨圧迫をしていませんでした。私は救急隊が到着するまで必死で胸骨圧迫を続けました」とその時の状況を語り、「講習で使う人形より実際の人間の体は固くて、うまく押せているのかどうか、不安でした」と述べながらも、講習会の経験があったからこそできた、と普段、講習を受けることの重要性を強調しました。

会社経営者の山口氏は 2015 年にランニング直後に倒れ AED で救命されたのですが、その半年後に今度はゴルフ場で人が倒れている場に遭遇し、AED で命を救いました。「私自身が救命されたのが一度目の奇跡、私が倒れた人を救うことができたことが二度目の奇跡」と語り、ご自身の会社の建物ごとに計 7 台の AED を設置しているということです。

木下氏は、大阪・関西万博にて AED GO を組み合わせた医療救護体制を導入した経験と実際に傷病者を救命できた事例を紹介しました。「事前の応急救手当講習だけでなく、AED GO の導入によって、スタッフにも自分が現場に AED を持つて行くという意識付けができるのではないか」と語りました。

その後、実際に万博会場で救命事例に立ち会った山崎氏のお話がありました。「倒れた人の顔色が悪く息をしていないようだったので駆け寄った。『AED を』と言ったらそこにあった。万博のスタッフと協力して胸骨圧迫と電気ショックを実施した」、そして「命を救うのには特別な資格は必要ありません。必要なのはほんの少しの気づきと立ち止まる勇気です」と語りました。



第二部 AED で命を救える社会の『仕組み』と『工夫』



座長 田邊 晴山



座長 島本 大也



西山 知佳



岩堀 仁



岡田 遥平



本間 洋輔

座長：田邊 晴山
島本 大也

日本 AED 財団 実行委員/救急救命東京研修所 教授
日本 AED 財団 実行委員/京都大学大学院 医学研究科予防医療学分野 特定講師

1. 京都大学の取り組み～AED の適正配置と管理/全新入生への教育プログラムと成果～
西山 知佳 日本 AED 財団実行委員/京都大学大学院 准教授
2. 企業における取り組み～全店舗への AED 設置と全従業員への教育～
岩堀 仁 ウエルシアホールディングス株式会社 総務部長
3. シンガポールはこんなに進んでいる！！
岡田 遥平 Duke-NUS Medical School Assistant Professor
4. 全ての場所で AED が 3 分で届く仕組みづくり～社会における EAP 実装への取り組み～
本間 洋輔 日本 AED 財団実行委員/千葉市立海浜病院 救急科 統括部長

第二部では、それぞれの組織、コミュニティ、地域において、より多くの命を救える社会の仕組みと工夫について、4人の演者からの講演がありました。

西山氏によれば、京都大学では 2015 年より毎年、新入生ガイダンスの中で全学生への PUSH コース（45 分間の救命講習）を実施しており、さらにその後の追跡調査の結果、講習を受けた学生の 25 人に 1 人が大学生活 4 年間の中で救命現場に遭遇していることがわかったとのことです。さらに西山氏は「PUSH コースを受けた先輩たちの救命事例の話や、学内で実際に使われた AED ボックスの写真を紹介することで、学生たちは本気で自分ごととして考えてくれます」と語りました。

岩堀氏は、全国 3000 店舗のドラッグストアで、誰でも目のつくレジのところに AED を置いているところを語り、「地域の方が安心して暮らせるように、従業員が自分自身の使命として持てるような動機づけや教育を普段から意識をしています」と話しました。また、地域社会貢献活動として各地域でお子さんと保護者を対象にした AED 講習を実施していることも紹介しました。



岡田氏は、シンガポールで国として機能的に整備された AED 環境について紹介しました。シンガポールでは、約 1 時間の AED 教育プログラムがあり、小学 5 年、中学 1 年の体育の授業で実技も含めて全員に必ず実施されていること、また、最近は幼稚園でも絵本を使って楽しく CPR・AED を学んでもらっていること。さらに、AED マップや、人が倒れた時に周囲に助けを呼ぶアプリ、CPR の速さや深さを認識して救急司令室から指示できる CPR カードなど、いろいろな進化の様子を現地からリモートで伝えました。

本間氏は、AED を設置するだけでなく、いざという時に皆が迅速に動いて救命するためのシステム、計画が必要で、こうした EAP（エマージェンシーアクションプラン、緊急時対応計画）の社会への導入が必要と語りました。この緊急時の対応フローを周知し、訓練することによって、会社やマンションなどで、いざという時に、3 分間で AED が使える体制を作れることを強調しました。また、市民からの協力を継続的に得るために、救命処置に関わった人へのメンタルケアも大切だと述べました。

第三部 パネルディスカッション

街中の緊急場面で、AED はどこにある、誰が動く



司会 石見 拓

日本 AED 財団 専務理事/
京都大学大学院 医学研究科
予防医学分野 教授



司会 堀 潤

NPO 法人 8bit News 代表/
ジャーナリスト



パネリスト 大神 明

産業医科大学
産業生態科学研究所 教授



パネリスト 木下 哲男
公益社団法人 2025 年
日本国際博覧会協会
危機管理局 担当課長



パネリスト 蝶野 正洋

プロレスラー/日本 AED 財団 AED 大使/
一般社団法人 NWH スポーツ救命協会
代表理事/公益財団法人日本消防協会
消防応援団



パネリスト 本間 洋輔

日本 AED 財団 実行委員/
千葉市立海浜病院
救急科 統括部長



パネリスト 村井 満

日本 AED 財団 理事/
公益財団法人日本
バドミントン協会 会長



第三部のパネルディスカッションでは、蝶野氏から、「全国の消防団を応援する立場から、「各地域、例えば都心と郊外では消防団の環境も活動内容も違うという前提で、それぞれの地域に合った形での AED 普及推進が必要」との発言があり、司会の石見氏より、「消防団は日本の誇るべき仕組みであり、各地域で AED による命を守る仕組みづくりをリードしていただきたいですね」との提案がありました。また、蝶野氏は「一般の方は、助けようという気持ちはあるのに、自分の時間が削られてしまうという頭が先に働くと思う。だから、救急車が来るまでの 10 分間を費やすだけという知識も大切」と語りました。

村井氏は「Jリーグのチェアマン時代、8 年間 AED を入れたナップサックを背負って通勤していました」と語り、「街中というと公共の大きな広場や駅を発想しがちですが、家や電車の中も含め、広い視点で街中を眺めていかない



といけないと思っています」と話しました。さらに、スポーツでの経験から、「ルールによって緊急時にかえって動きにくいこともありますが、社会においては規範（ルール）だけでなく命を尊ぶ意識や 1 秒を争うという知識も大切」と語りました。

司会の堀氏が「仕組み作りと意識づくりと、それを自動化できるような試みというのがまさに大阪・関西万博の会場での AED GO の活用でしたね」と木下氏に問いかけると、木下氏は「はい。そうした万博での成功事例というものをしっかりと伝えていくことが大切」と答えました。

大神氏は産業医の立場から「多くの産業医は普段、大学や医療機関にいて、月1、週1だけ産業医として企業に向かうので、現場のAEDの場所すら知らないこともあります」と現状を語り、「これからは産業医のチェックリストにAEDを入れて、産業医が職場の安全をリードしていくようにします」と前向きに語りました。大神氏によれば、AEDの普及によって職場における死亡件数は減少しているとのこと。「これをゼロに近づけるのが産業医の役割」と発言されました。

最後に、本間氏は、「AEDをただ設置するだけでなく設置場所も大切」と語り、実際に駅に設置されたAEDでも10回使われたAEDと、一度も使われていないAEDがあることを紹介しました。そして、「社会で活用できるEAPを日本AED財団でしっかり作っていきます」と語りました。



『減らせ突然死、AED推進フォーラム 2025』 記録動画を公開しました

2025年12月3日(水)に開催したAED推進フォーラム2025 第1部～3部の記録動画を財団公式YouTubeに公開しています。

「AEDで命を救える社会の『仕組み』づくり一街中における緊急時のAEDへのアクセス改善に向けてー」をテーマに行われた、多方面にわたる講演やディスカッションをぜひご覧ください。

- 第1部 自分たちの日頃の準備が役立った！
- 第2部 AEDで命を救える社会の『仕組み』と『工夫』
- 第3部 パネルディスカッション
街中の緊急場面で、AEDはどこにある、誰が動く

AED推進フォーラム
動画リストはこちら ►



AED展示コーナーの様子



受付の様子



2025 年度



AED 功労賞 授賞式



審査員長 平出 敦

明治国際医療大学 保健医療学部
救急救命学科 特任教授

最優秀賞



おもちゃ AED 開発・販売 (AED を楽しく知る人を増やしたい)

株式会社坂野電機工業所 坂野 恭介 様

坂野 恭介 様 受賞のコメント

AED の販売をしていると、医療関係者と一般の人では AED の知識の差がまだまだあることを痛感しました。AED の知識、重要性を伝えることためには、日常に溶け込むような体験を作ることが大切だと思っています。私たちは次世代の AED の認知サイクルを作りたいと思っています。子供から大人になるまで当たり前のように「AED って知ってるよね」というような世代を作っていくなら。『トイこころ』はそのサイクルの一つだと思っています。

おもちゃ AED
「トイこころ」

優秀賞



名古屋で 1 番名古屋を推すビジュアル系バンドが
ファンや地域とともに展開する救命力向上プロジェクト

麗麗-reirei- 様

麗麗-reirei- 様 受賞のコメント

派手な衣装に見えますが、私たちビジュアルバンドの正装です(笑)。AED の普及活動という命に関わる重い話ではありますが、楽しくやりたいと思いました。まだ AED のことを知らない 0(ゼロ)の人がたくさんいます。僕らもゼロでしたが、これが 1 になるいろいろなことができるようになりました。ゼロから 1 になる人が広がっていけば、それが 2 にも 3 もになります。音楽家ができるとして、ゼロから 1 になる人を増やしていきたいと思っています。



特別賞



AED をミキサー車全 70 台に搭載した「走る AED」活動と
従業員 50 余名の個人宅に AED を貸与することによる地域救命体制の構築

河島コンクリート工業株式会社 様

河島 慎吾 様 受賞のコメント

本日のこの特別賞が先の未来では全く特別ではない、というくらいになってもらいたいと心から願っています。今年の 1 月に私が乗ったタクシーの運転手さんから、その会社の全タクシーに AED が搭載されているけど、使わないのに講習が面倒という話を聞きました。私は使わないほうがいいけれど、これは走る AED だなと思い、わが社にも全ミキサー車に導入しました。導入する直前に実際に 50 代の社員が倒れるという事例があり、社に 1 台あった AED で助かり、やはり AED は重要だと思いました。



特別コラム

一瞬の判断が命を救う

中村俊輔氏が語る

AEDと「準備」の重要性

試合中、観客席で倒れた方のもとへ、誰よりも早く AED（自動体外式除細動器）を届けた人がいました。日本サッカー界のレジェンド、中村俊輔氏です。

なぜあのような行動がとれたのか、そして AED 普及にかける思いとは。中村俊輔氏に詳しくお話を伺いました。



中村 俊輔 氏 元プロサッカー選手

1. 「自分が持っていた方が早い」— とっさの行動の裏側

スタジアムで観客が倒れた際、中村氏はメディカルスタッフが持っていた AED のバッグを受け取り、全力で観客席まで走りました。この行動について中村氏は、「スタッフが走っていくよりも、自分が持っていた方が早いと思った」と振り返ります。

「一刻を争うとか、そういう問題じゃないですか。だからとっさに動いて。(中略) 観客席の現場に既にドクターの方がいたので、その方に渡しました」

なぜ体が動いたのか、自分でも理由はわからないとしつつも、その背景には所属していたクラブで年に一度行われる AED 講習による「知識」があったと語ります。

2. 「もし自分の家族だったら」— 講習が与える自信

中村氏は、講習を受けるようになってから、スタジアムやクラブハウスだけでなく、普段の生活でも駅や街中で「あ、ここにあるんだな」と AED の場所を意識するようになったそうです。

講習を受けて目覚めたことについて、中村氏は次のように語ります。

- 自信と安心感：講習を受けていると自信がつき、不安がなくなる。
- 自分事として捉える：倒れたのがもし自分の家族だったらと考えると、守るために知識を身につけておきたいと思う。
- つながりで救う：使い方がわからなくても、知識を持った人が集まれば助け合える。そうした「つながり」が増えれば、助かる可能性も増えていく。

3. 松田直樹氏が遺したもの、そして未来へ



サッカー界で AED の普及が進んだ背景には、2011 年に亡くなった松田直樹氏の存在が大きいと中村氏は言います。あの有名な松田直樹氏が練習中に倒れたという衝撃は、多くの人に「AED があれば助かったかもしれない」「AED とは何なのか」を考えさせるきっかけとなりました。

インタビューの最後、中村氏はこれからの AED 普及について力強く語ってくれました。

「これって本当に一刻、一秒を争うことなので、しかも、生きるか、亡くなるかの瀬戸際。そういったときに瞬時にパッと動ける、ということが大事なんじゃないですか。助けようという意識があっても(AED のある) 環境がない、環境があっても意識がない、両方なければいけないと思うので」

「環境」と「意識」。この両方が揃うことで、救える命は確実に増えていきます。中村氏は、旅先で周りに誰もいなくても自身がパッと意識して行動すること、スタジアムや街中だけでなく、もっと自宅などにも AED を備えられるような環境がどんどん広まればいいと願っています。

私たちも、まずは「講習を受けること」そして「街のどこに AED があるか」を知ることから始めてみませんか？

